

【画像1：京劇の衣装を着用した水野勝邦】



〈史料紹介〉

水野勝邦の中国研究関係資料

1. はじめに——水野勝邦と中国

本稿では、旧結城藩水野家（子爵）が所蔵する近代の水野家関係文書から、水野勝邦による中国研究関係資料を紹介する。

水野勝邦は、旧結城藩水野家第一九代として一九〇四年（明治三七年）に生まれた人物で、父親は貴族院の会派「研究会」で中心的

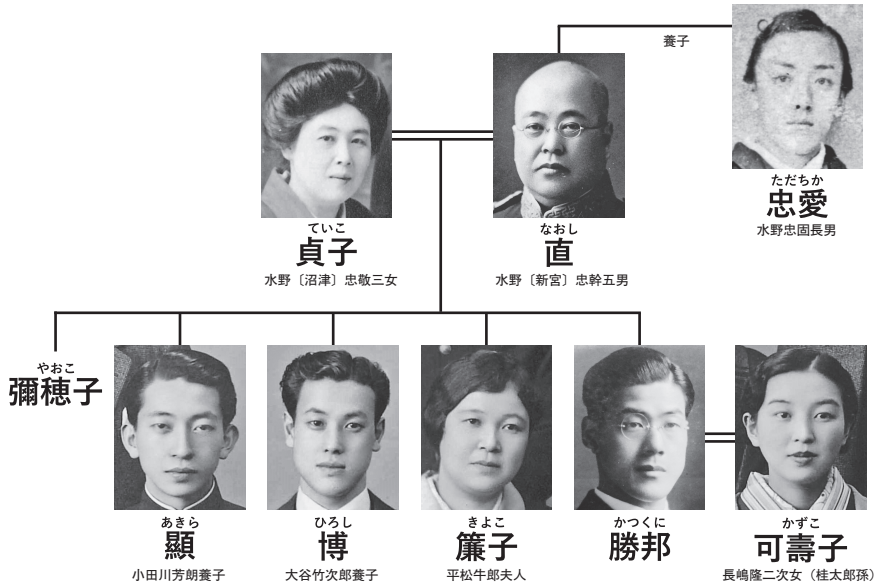
長谷川 伶

役割を果たした水野直（新宮藩の水野家出身）である。【画像1】

勝邦は学習院在学中の一九二五年、修学旅行で満洲を訪問し、一九二八年に学習院を卒業、東京帝国大学文学部に進学し「支那哲学」を専攻した。一九三一年に大学院に入学すると同時に昭和第一商業学校講師となり、同年には外務省派遣中華民国調査員を委嘱され、六月～十一月に中国へ派遣された。この時期は、中国語の習得をしながら「支那全般予備知識」、「支那上代史蹟」、「国際都市トシテノ上海」、「支那思想問題」、「香港ニ於ケル支那勢力」などのテーマに取り組んだ。大学院修了後、専修大学講師として経済学部で東洋経済事情、中国文化の講座を担当した。

一九三八年三月、任期二年の外務省在支特別研究員に選出された際の研究テーマは「現代支那文化ト社会経済思想ノ研究」で、「蒙古民族文化視察旅行」をはじめ、各地での調査旅行を実施した。外務省からの補給年額は二四〇〇円であり、調査旅行に際しては別途補給金の支給を受けた。¹⁾ 外務省外交史料館には勝邦がまとめ文化事

水野家（旧結城藩：子爵）家系図



業部が関係者・機関へ配布した報告書「北京ノ新聞ニ就テ」、「満洲蒙古旅行により得たる対蒙問題の結論」⁽³⁾などが所蔵されている。また、同年に専修大学教授となり、一九三九年、北京の西城屯絹胡同（現在の北京市西城区）に住居「水野公館」を構えると共に北支那開発会社調査局の嘱託を兼任した。

一九三九年に貴族院議員（子爵議員、研究会所属）に当選すると、外務大臣に「議員トシテ其任ヲ全フスルト共ニ從來通り研究モ相續度候」旨を届け出て許可を得た。貴族院議員としては、中国視察や皇軍慰問にも参加している⁽⁴⁾。また研究会の調査部理事を務めた。

一九四〇年に拓務省委員、一九四三年には大東亜省委員に就任し、日中を往復すること三六回⁽⁵⁾に及んだが、昭和一九年末に議會出席のため一時帰国し、戦局悪化のため再び中国の地を踏むことなく終戦をむかえた⁽⁶⁾。戦後は立正大学（教授）や麗澤大学（講師）で中国經濟を講義するなど、終生中国研究に携わるとともに、かつて自らが議員を務めた貴族院の歴史についてまとめ、貴族院研究の基礎を築いた⁽⁷⁾。

水野勝邦は以上のような経歴を持つが、中国における活動の詳細については、ほとんど知られていない。

2. 史料整理の経過と概要

筆者は二〇一四年頃、学習院の満洲修学旅行に関する論文を書くための調査を進める過程で水野勝邦が旅行に参加したことを知り、勝邦長女の上田和子氏（旧姓水野）に史料の有無を尋ねた。その後、上田氏および勝邦長男の水野勝之氏から水野家に満洲修学旅行時の

史料群	史料の内容	年代
水野直関係史料	任免関係証書、水野家金銭出納帳、光熱費領収証書類、貴族院清国視察関係書類ほか	明治～昭和初期
水野勝邦関係史料（戦前）	学習院卒業証書、アルバム・スクラップブック（学習院時代）、手帳、任免関係証書、招待状類、法要関係書類、相続関係書類ほか	大正～昭和
水野勝邦関係史料（戦後）	大学関係書類、手帳、スクラップブックほか	昭和 20 年代以降
水野勝邦中国研究関係史料	満洲修学旅行関係資料、中国研究関係書類綴、スクラップブック、アルバムほか	大正～昭和 10 年代
中国関係書籍	中国研究、満洲関係ほか書籍・雑誌	昭和 10 年代
水野家関係写真	水野家集合写真、アルバムほか	明治～昭和
絵葉書、ラベル、切符ほか	勝邦が蒐集した絵葉書、ラベル類などを収めたアルバム、スクラップブックなど。一部に直時代のものも含む。	明治～昭和
和本	水野家で読まれていた、あるいは趣味として蒐集した和本類。	江戸～明治
パテベビー（フィルム）	水野家の旅行や行事等を記録したパテベビー ＊デジタル化済	昭和 10 年代
その他資料	書画、メダル類、旅行用トランクなど	明治～昭和

パンフレット類が保存されているとの連絡を受けた。それらの調査を願ったところ、御快諾頂き、都内にある保管場所へ赴いた。

保管場所には、紙袋に入った状態で満洲修学旅行関係史料があったほか、多数の段ボール、プラスチックケースが置かれそれらの中に大量の水野家の近代史料が入れられていた。水野家は、これらの史料の概要を把握した上で、種別ごとに適切な保管場所（史料館、文書館等）へ寄贈したいとの意向を持っていたことから、筆者は調査をさせて頂くかたわら、史料整理を行うことを申し出た。

史料整理は、水野勝之氏の三女である水野節子氏と共同して月に一度のペースで行うこととなり、二〇一五年後半から約二年にわたって継続してきた。本稿執筆の段階（二〇一七年一〇月）で、完全に整理と目録作成は終了していないが、史料の種別とおおよその内容は上表のように分類できる。

なお、水野直、勝邦の貴族院議員としての活動に関わる憲政史料は、すでに水野家から国立国会図書館憲政資料室に寄贈され公開されている。また、水野直の学習院時代の授業ノート、水野勝邦の戦時期の株券類などは学習院アーカイブズに寄贈されている。

筆者は主に中国に関する史料と書籍類の整理、目録作成を進め、水野節子氏が写真類や水野家の書類などを整理した。写真資料の多くには裏書がなく、写された人物や場所などの特定が困難であったが、上田和子氏、水野勝之氏に適宜聞き取りを行うことでかなりの部分を判明させることができた。

これらの史料は、整理完了後に水野家より史料館等へ寄贈される予定であり、現在各所と調整中である。

3. 水野勝邦の中国研究関係資料

子爵家の当主であり、貴族院議員を務めながら中国研究に携わるという異色の経歴を持つ水野勝邦は、これまで近代日中関係史や中国研究の文脈の中でほとんど知られていなかった。その理由として、勝邦と中国との関わりを示す書類や写真などの記録が水野家で長らく保管されてきたということがあるだろう。また、一九四四年に勝邦は議會出席のため中国を離れて帰国するが、本人は北京へ再び戻るつもりであった。ところが戦局の悪化と敗戦でそれは叶わず、北京に残した資料は関係者によって処分されたか、中国側に接収されたとも考えられる。

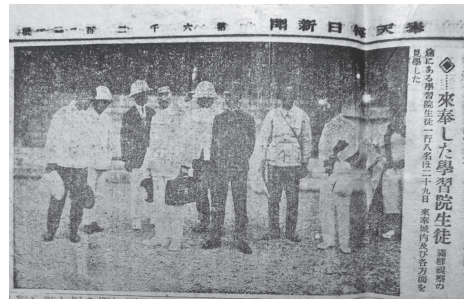
ちなみに、溥儀が著した『わが半生』には、一九三一年七月二九日、天津で満洲行きを待つ期間中に勝邦の接見を受けたことが記されている。勝邦は溥儀と鄭孝胥と陪席し、溥儀に「天莫空勾踐時非無范蠡」⁽¹⁰⁾と書かれた扇子を贈った。この時に勝邦が溥儀を訪ねた理由は詳らかでないが、外務省からの派遣調査員として外務省の機密に関わる動きをしていたとも想像され、こうした点から後々も史料をあえて残さなかったのではないかと推定する。

本史料紹介では、水野家所蔵の近代史料の中から中国に関する史料を抽出、以下のとおり五種に分類し解説と分析を行う。

- ①「学習院満洲修学旅行関係資料」、②「中国研究の履歴書」、③「松竹少女歌劇北支慰問団アルバム」、④「中国関係フィルム」、⑤「その他資料」。

上記史料中、一部に関しては翻刻を行ったが、旧漢字を現代漢字

【画像2：『奉天毎日新聞』に掲載された学習院修学旅行の記事（1925年7月31日）】



に直し、適宜句読点を補った他は原文ママとした。

①「学習院の満洲修学旅行関係資料」【目録1参照】

学習院在学中の一九二五年に勝邦が参加した満洲修学旅行⁽¹¹⁾において現地で収集した観光案内やパンフレット類、関係書類が封筒にまとめて入れられている【画像2・3】。

勝邦は旅行の終盤、

ハルビンにおいて病にかかり、哈爾濱日本共立病院で入院を余儀なくされるというトラブルに見舞われるが、「強い感銘をうけたのです：この旅行から中国と取り組む決意を持ちました。それから、事に臨み、考えるのに常に中国研究を前提とし⁽¹²⁾」と後に回想している。この旅行こそが勝邦の中国研究の原点であった。

これらの資料のうち、参加学生に旅行の概要や注意点を周知するために配布された旅行のしおり「旅行ニ関スルコト」は海外修学旅行の概要を捉えることができ、かつ旅行に役立つ参考文献も記載されており、当時の学習院の教育の一端を知る上でも重要である⁽¹³⁾。

なお、本史料群には写真が含まれていないが、水野家所蔵の別のアルバム内に大連で撮影された写真【画像4】と、哈爾濱で入院中

【画像3：学習院満洲修学旅行時に収集したパンフレット類】



②「中国研究の履歴書」【目録2参照】
 勝邦が戦後に自らの中国研究のあゆみを振り返りながら戦前期の書類や写真などを貼付してまとめたスクラップブックである。勝邦の中国時代の記録は、上述の通りほとんど残されておらず、本スクラップブックがほぼ唯一、中国時代の足取りを伝える記録である（全八〇ページ。綴られた原稿等のページ数は除く）。内容は以下の通りである。
 1…履歴書、2…執筆した論文・報告書リスト、3…旅行記ばかりスト（中国雑記）、4…大学等における講義内容リスト、5…「華北

の写真【画像5】が収められている。

【画像4：大連で大豆粕を持ち上げる勝邦】



【画像5：哈爾濱で入院中の勝邦（写真裏には「長春病院」とあるが誤記）。左が母親の貞子】



【画像6：「中国研究の履歴書」】



での活動を再現したい。以下、2…執筆した論文・報告書リスト、3…旅行記ばかりリスト（中国雑記）、6…中国渡航記録、7…「水野公館の開設」の詳細を示す。

2…執筆した報告書リスト・3…旅行記ばかりリスト

水野勝邦が一九三〇年代初頭（東大大学院在籍時）から終戦までの間に執筆した論文、報告書および旅行記などのエッセイの一覧。論文および報告書のうち、掲載誌や年代の不明なものの一部を、論文や雑誌記事データベースにより補完した。また、勝邦が「中国雑記」と記載している旅行記等の一覧については、いずれも掲載誌等が不明である。（二二六～二三七頁参照）

ノ諸問題」（一九四四年に執筆したもので、外務省へ提出した報告書の控えと推定。野紙にペン書き）、6…中国渡航記録、7…「水野公館の開設」（水野公館開設に関するメモ・写真）、8…身分証明書ほか関係書類、9…中国関係写真。【画像6】

本スクラップブックの内容に沿って勝邦の中国

6…中国渡航歴記録

一九二五年の満洲修学旅行から一九四四年に至る全三六回の中国渡航の一覧である。記録からは、日中戦争の占領地統治のために南京や漢口へ赴いたことも分かる。

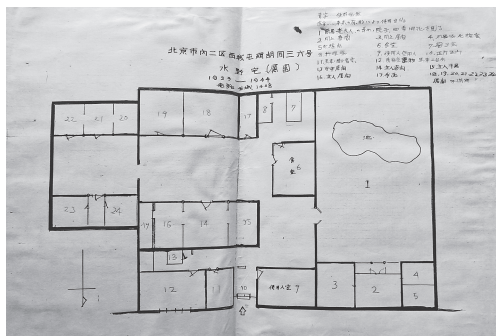
この渡航記録と対照することで水野家所蔵史料（文書、書類、写真）の年代をある程度絞り込むことができる。（二三八頁参照）

7…「水野公館の開設」

一九三九年に北京に開設した「水野公館」について記した短文である。勝邦の中国での研究活動はここを拠点として行われた。【画像7】

義父長島隆二が対中国和平工作に乗り出したことから北京に公館を開設することとなり、宮元利直（当時日本軍司令部顧問）の計らいで西城屯絹胡同にあった中国人の邸宅（礪園）と表示あるを日本人を仲介にして賃借す。源の使用者は或銀行の重役とのこと。深く追求しなかった。月額約200円、間数21房子。日本人向に畳、日本風呂あり。しかし院子には四季を通じ開花を見、なつめは三本あり、少しづつ実をつける時期がずれていたからかなり長期間味はえた。昭和14年3月より終戦時まで使用。終戦時には中国使用人のみ留守番で日本敗ると知るや重慶軍はトラックで侵入し目ばしい品（日用品、衣服など）を掠奪して行ったとのこと。早くから日章旗と五色旗を時に臨み門前

【画像 7：水野公館平面図】



に掲げていたから、胡同の中国人は日本人家屋なることを知っていた。貴族院議員団の来訪があり（昭和16年10月）、大谷隆三松竹社長も来た。

文中に登場する長島隆二は、「義父」とある通り、勝邦の妻である可壽子の父親である。長島は東京帝国大学法科大学卒業後に大蔵省へ入り、日露戦後は理財局国庫課長として財政経済整理を担当、後藤新平や井上馨との関係が生まれ、桂太郎の三女である潔子と結婚した。第二次桂内閣で首相秘書官、第三次桂内閣では理財局長心得となるが、内閣倒壊と共に辞職し立憲同志会を基盤として政界へ

【画像 8：水野公館における李香蘭父子との会食場面（中央左が李香蘭（山口淑子）、右が山口文雄、右から2人目が勝邦）】



入った。その後、長島は立憲同志会を脱党し、新党の創立で国民外交を実現し中国との提携により日本の発展を図ることを模索した。⁽¹⁴⁾日中戦争が始まると、一九三九年に長島は北京に滞在し「陸軍大將畑俊六大将の内意を受けて北支那に呉佩孚將軍を中心に新政権を樹立して、蒋介石と手を握り日支和平工作の準備を進めようとした。⁽¹⁵⁾「支那の要人孫潤宇、李景鈇氏の如きは毎日の様に」長島を訪ねてきたという。しかし、呉佩孚擁立による和平工作は、王克敏を援助する山下奉文らから反感を買ひ、長島はスパイの嫌疑をかけられたため急遽大連へ逃れ、また呉佩孚が死去したことから工作は失敗に終わった。長島は一時的に日本へ帰国し、「和平の途は蒋介石本人と直接に結ぶより方法がない」との信念を固め、蔣と親交深かりし朝

【画像 9：水野公館前における勝邦の家族ほか（左から武藤梅子、懂恆、水野（上田）和子、水野可壽子）】



鮮志士の申錫雨氏等を通じて自らも単身重慶へ乗り込む覚悟」で北京や上海などを訪問し要人との折衝を続けていたが、一九四〇年に死去した。

また、公館開設にあたり宮元利直から協力を得たことも記されている。宮元は第一次大戦後に日本の軍政下にあった青島で大興公司が経営する塩田の取締役として中国での活動を開始した。妻のこゆきは清浦奎吾の縁戚にあたる。青島還付の際、居留民代表の一人として中華民国側と交渉を行い、そこで知り合った膠奥商埠督弁公署政務署長の王芑生の依頼により政務顧問となった。以後、広範な人脈を築き日本の特務工作員として活動、満洲国軍の顧問や冀東地区での非戦区十九県調査委員会最高顧問などを歴任し、日中戦争中に

【画像 10：水野公館内の貴族院議員一行（左から穴戸功男、柴田兵一郎、1人おいて丸山鶴吉、水野勝邦）】一般社団法人尚友俱樂部蔵



は募兵工作に携わった。⁽¹⁷⁾ 水野家所蔵の写真の中には、宮元公館などで宮元と勝邦と一緒に写った写真も多く存在し、両者が日常的に親交を持ち、日中外交の裏面で様々な協力体制を築いていたであろうことが推測される。

③「松竹少女歌劇北支慰問団アルバム」

本史料は、「松竹少女歌劇北支慰問団」のアルバムである。写真七五枚（団員のブロマイド含む）およびサイン入り絵葉書二枚が貼付されている。【画像11～15】

一九三八年一月一日から二月二日（東京発着）にかけて松竹少女歌劇団（SSK）メンバーの華北慰問が行われた。参加し

【画像 11：松竹歌劇部慰問団遊覧萬壽山紀念 昭和十三年十一月二十二日（後列右から 2 人目が勝邦）】



たのは水の江瀧子、三田絹代、市村菊子、伊沢蘭子、対馬洋子、楠見あきら、伊丹陽子、夕月浅子の計八名である。この慰問団は水の江瀧子の愛称から「ターキー部隊」とも称された。⁽¹⁸⁾ 水の江は回録で「慰問団じゃ一番最前線まで行ったんじゃないかな。夜になると大砲の音が聞こえてたわね」と語り、高粱畑の中で列車が停まり、抗日ゲリラの襲撃を受けたこともインタビューで答えている。⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾

当時、松竹の常務だった大谷博（一九一〇～一九九五）は、もと水野家の出身（直次男、勝邦の弟）であり、学習院から神戸商大へ進み、卒業後に松竹の創業者である大谷竹次郎の養子となった。慰問団の派遣に際し、実の兄である勝邦を頼ったことから現地では勝邦が慰問団の案内などを行った。

【画像 12：水の江瀧子と水野勝邦】



本アルバムには楽屋内の様子や舞台から見た客席の兵士の写真、移動途中のスナップなど、これまで公表されていない写真も含まれており、貴重な記録である。

④「中国関係パテベビー」

一九三〇年代に勝邦（水野家）が趣味または旅行の記録として撮影したパテベビー（フィルム）である。⁽²¹⁾ 全てデジタル化が完了している。⁽²²⁾ これらの中には一九三〇年代（外務省の調査員時代）に勝邦が中国で撮影した複数の映像がある。風俗資料として貴重であり、

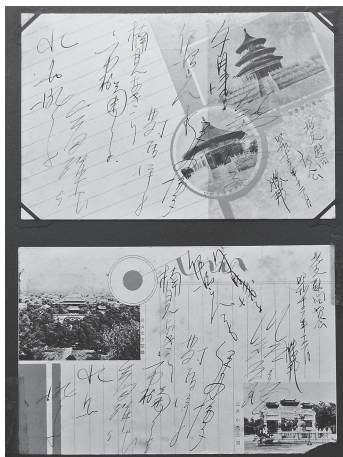
【画像 13：慰問公演を行う松竹歌劇部】



【画像 14：慰問公演時の歌劇部の楽屋】



【画像 15：参加した歌劇部員のサイン入り絵葉書】



⑤ 「その他資料」

中国の新聞記事スクラップブック、勝邦が中国で出席した会合等の案内状や参加者名簿、広告や雑誌切抜きを綴ったファイル、勝邦自身が各地で撮影した写真（風景、建築、女性など）のアルバム多数、また宮元公館における要人との集合写真（台紙に貼付された大判写真）などである。【画像 20】また、勝邦が趣味で収集した大量の絵葉書を収めたアルバムには多くの中国・満洲関係の絵葉書も含まれる。

おわりに

本史料紹介では、水野家に残された様々な史料と、外交史料館に所蔵される報告書類、新聞記事などをクロスオーバーさせることで、勝邦の中国との関わりのアウトラインを描き出そうと試みた。

勝邦本人がまとめた論文等の一覧や渡航記録により、外務省からの派遣による調査のみならず、北支那開発株式会社顧問、大東亜省委員など様々な立場で勝邦が中国で活動を行い、また占領地統治にも関わりを持っていたことが判明した。中国での活動を記録した一時史料が今後更に発見される可能性は乏しい

また当時の日中関係をうかがううえで重要な映像も多く含まれている。詳細については紙幅の関係から割愛し、映像からキャプチャした画像を掲載するにとどめる。【画像 16～19】

【画像 16：上海共同租界】



【画像 17：上海の東亜同文書院】



【画像 18：北京の西四牌楼】



【画像 19：街路の壁面に貼られた排日ポスター
（殺殺殺到東京）】



【画像 20：宮元公館における曹汝霖ほか集合写真。1938年5月15日撮影（前列左から3人目より宮元利直、曹汝霖、宮元こゆき。2列目左端が勝邦）】

が、本史料紹介の執筆を通じて明らかにになった事実や、勝邦の人脈などについて、今後調査を進めたい。

本稿の作成にあたり、上田和子氏、水野勝之氏、水野節子氏からは貴重な資料をご提供頂いたほか、近代の水野家の歴史について種々教示を頂きました。記してお礼申し上げます。

- (1) 「水野勝邦 一九三八年」〔在華本邦特別研究員関係雑件〕、外務省外交史料館蔵、H57-062.003
- (2) 「北京ノ新聞ニ就テ」〔支那視察報告第六号〕〔文化56、一九三九年外務省外交史料館蔵〕。
- (3) 前掲「水野勝邦」〔在華本邦特別研究員関係雑件〕。
- (4) 一九四一年に水野勝邦が中心となり、土岐章、六戸功男、柴田兵一郎、丸山鶴吉と共に行った貴族院皇軍慰問については、千葉功監修、尚友倶楽部・長谷川怜編『貴族院・研究会写真集』〔芙蓉書房出版、二〇一三年〕を参照。
- (5) 水野勝邦「中国研究の履歴書」〔水野家蔵〕に記された「中国渡航記録」(リスト)による。回数は三七回と記されているが、南洋視察のための渡航が含まれていることから三六回が正確な回数である。
- (6) この帰国(一九四四年一月)の際、北京総領事の華山親義が発行した勝邦の身分証明書が残っている。本書類には、議会出席後、一九四五年三月に再び北京へ戻る予定であることが記載されている。
- (7) 水野勝邦による貴族院研究書として、『貴族院の会派研究会史』〔尚友倶楽部、一九八〇年〕、『貴族院子爵議員選挙の内争』〔尚友倶楽部、一九八六年〕などがある。
- (8) 水野勝邦の経歴については、「水野勝邦履歴書」一九三七年〔外務省

外交史料館蔵H57-062.003)、「水野勝邦履歴書」(一九八〇年カ 水野家蔵)を参照。

- (9) 目録は憲政資料室ホームページを参照。

(10) この詩句は、春秋時代、越王勾践が呉に敗れた際、忠臣である范蠡が勾践を助けて呉を滅ぼしたという故事を示している。南北朝時代に、後醍醐天皇が軟禁されていた屋敷の庭に忍び込んだ児島高德が、天皇を救い出す忠臣が必ず現れるという気持ちをも、この詩句に仮託して桜の幹に刻んだといわれる『太平記』。勝邦は、事前にこの詩句の意味を溥儀に伝え、溥儀は溥儀からの手紙で詩句を理解していた。溥儀は「玉座に復帰する夢」を毎日見ていた時期であり、この詩句の暗示は「私にとって、事実上進軍ラッパの役割を果たした」と記している(愛新覚羅溥儀〔小野忍はか記〕『わが半生「満州国」皇帝の自伝』上 筑摩書房、一九七七年 二四六ページ)。

(11) 学習院の海外修学旅行については、拙稿「満洲を旅した学生たち 旧制学習院の満洲修学旅行を事例として」(福井憲彦監修、伊藤真実子・村松弘一編『世界の蒐集—アジアをめぐる博物館・博覧会・海外旅行』(山川出版社、二〇一四年)を参照。勝邦が参加した旅行の概要は「海外修学旅行」『学習院輔仁会雑誌』第二五号、一九二五年)を参照。

(12) 水野勝邦「私と中国(旅の思い出)」(一九七五年、上田和子氏蔵)。

(13) 本史料の翻刻は紙幅の関係から割愛するが、概要については拙稿「学生たちの見た大陸—学習院の海外修学旅行」『学習院アーカイブズニューズレター』十一号、二〇一八年二月)にて紹介。また、勝邦が現地で撮影した写真の検閲をめぐる旅順要塞司令部とのやり取りを示す書類も存在するが紙幅の関係から紹介は割愛する。

(14) 櫻井良樹「日中提携と「国民的新党」の創設」(『日本政治学会年報 日本外交におけるアジア主義』岩波新書、一九九八年) 九二ページ。長島の生涯を通じての政治活動については本論文を参照。

(15) 水野可壽子「亡父を憶ふ—日華親善を念願とした其の一生—」(一九

四六年、水野家蔵）三七ページ。本史料は、水野可壽子が原稿用紙に筆記したもので、父親である長島隆二の生い立ちから政界入り、日中和平工作を展開するに至る経緯とその死までがまとめられている。前掲の櫻井良樹「日中提携と『国民的新党』の創設」でも一部が参考にされているが、全文はこれまでに公開されていない。

(16) 同右。

(17) 宮元に関する記録として、花村一平『中国革命の舞台裏 北京・宮元公館』（原書房、一九七三年）がある。宮元からの聞き取りと提供されたメモなどを用いた実録であるが、一次史料の出典が明らかにされておらず、また物語風に全編がまとめられていることから、事実の裏付けが取れない箇所もある。なお、本書中には水野家に所蔵されているものと同じ写真が掲載されている。

(18) 前線の兵士に向けて海軍が発行していた慰問雑誌『戦線文庫』（第四号、一九三八年）にもこの慰問団の様子が取り上げられている。押田信子『兵士のアイドル 幻の慰問雑誌に見るもうひとつの戦争』（旬報社、二〇一六年）三〇〇～三〇二ページ参照。

(19) 水の江滝子『ひまわり婆っちゃん』（日本図書センター、二〇〇四年）六五ページ。

(20) 阿部和江『わすれられない戦争―4人が語る慰問の話』（はがね文庫、一九八九年）三〇ページ。

(21) パテベビー (Pathe Baby) はフランスのパテ社が販売していた9.5mmの家庭用フィルム。8mmフィルムが普及するまでは小型映画の主流であった。

(22) デジタル化したデータは二〇一八年三月現在非公開。

目録 1：学習院の満洲修学旅行関係資料

史料名	作成者	年代	形態	備考
大連航路案内	大阪商船株式会社	1925 年	パンフレット	
〈大阪商船株式会社荷札〉	大阪商船株式会社	1925 年	札	大連行 はるびん丸 金田殿御一考
御乗船記念	大阪商船株式会社	—	手帳、絵葉書 (3 枚)	封筒あり
新緑の海に風薫る	大阪商船株式会社	—	パンフレット	
〈大阪商船株式会社手帳〉	大阪商船株式会社	—	手帳	
海へ	大阪商船株式会社	—	パンフレット	
〈満鉄東京鮮満案内所パンフレット〉	満鉄東京鮮満案内所	1925 年	パンフレット	
満蒙の話	満鉄鮮満案内所	—	パンフレット	
鮮満旅程ト費用概算	満鉄鮮満案内所	—	パンフレット	
鮮満旅程ト費用概算	満鉄鮮満案内所	—	パンフレット	
鮮満支旅行案内	満鉄東京鮮満案内所	—	冊子	
朝鮮満洲旅行案内（附支那旅行案内）	満鉄鮮満案内所	1925 年	冊子	
金剛山探勝	満鉄京城鉄道局	—	パンフレット	
朝鮮の風習	朝鮮総督府	1924 年	冊子	
景福宮案内	朝鮮総督府	1923 年	パンフレット	
平壤 鎮南浦 兼ニ浦	南満洲鉄道株式会社 京城鉄道局	—	パンフレット	
京城 開城 仁川 水原	朝鮮総督府鉄道局	1925 年	パンフレット	
朝鮮旅行案内	京城鉄道局	1924 年	パンフレット	
朝鮮旅行案内	京城鉄道局	1924 年	パンフレット	
朝鮮案内	—	—	パンフレット	
朝鮮案内	—	—	パンフレット	
朝鮮案内	—	—	パンフレット	
朝鮮の教育	朝鮮総督府	1924 年	パンフレット	
朝鮮総督府博物館区域図	朝鮮総督府博物館	—	1 枚刷り	
満洲旅行案内	南満洲鉄道株式会社	1924 年	パンフレット	
満洲旅行案内	南満洲鉄道株式会社	1924 年	パンフレット	
大連案内	南満洲鉄道株式会社	1924 年	パンフレット	
DAIREN	Japan Tourist Bureau Dairen Branch	1925 年	パンフレット	
奉天概観	奉天日本総領事館	—	パンフレット	
長春地方案内	南満洲鉄道株式会社	1924 年	パンフレット	
鞍山製鉄	南満洲鉄道株式会社	—	パンフレット	
撫順炭礦一覽表	南満洲鉄道株式会社 撫順炭礦	1925 年	地図	
〈撫順炭鉱関係図面〉	南満洲鉄道株式会社 撫順炭礦	—	1 枚刷り	計 4 枚
哈爾賓案内	哈爾賓商品陳列館編	1925 年	冊子	メモ（紙片）の挟み込みあり。巻末に地図あり。
満鮮旅行案内	満鮮旅行案内社	1925 年	冊子	
満蒙畜産工藝概況附録 満蒙ノ家畜 解説書	第二回畜産工藝博覧 会満蒙出品館	—	パンフレット	
満蒙畜産工藝概況附録 満蒙ノ家畜 解説書	第二回畜産工藝博覧 会満蒙出品館	—	パンフレット	
満蒙畜産工藝概況附録 満蒙ノ家畜 解説書	第二回畜産工藝博覧 会満蒙出品館	—	パンフレット	
満蒙畜産工藝概況	第二回畜産工藝博覧 会満蒙出品館	—	パンフレット	
満蒙畜産工藝概況	第二回畜産工藝博覧 会満蒙出品館	—	パンフレット	
満蒙産業一斑	南満洲鉄道株式会社	—	パンフレット	
満蒙産業一斑	南満洲鉄道株式会社	—	パンフレット	
満洲医科大学便覧	満洲医科大学	1925 年	冊子	
業績ノ大要	南満洲鉄道株式会社 中央試験所	1925 年	冊子	

史料名	作成者	年代	形態	備考
窯業工場概要	南満洲鉄道株式会社 窯業工場	1924 年	冊子	
台湾の旅	森御蔭	1925 年	冊子	
農事試験場彙報第十三号 南満洲ノ牧羊	南満洲鉄道株式会社 農事試験場	1922 年	冊子	
農事試験場彙報第十七号 満洲豚ニ関スル調査	南満洲鉄道株式会社 農事試験場	1924 年	冊子	
南満洲鉄道株式会社地質調査所業務概要	南満洲鉄道株式会社 地質調査所	—	冊子	
南満洲鉱産地一覧	南満洲鉄道株式会社 地質調査所	1924 年	冊子	
沙河工場概況	南満洲鉄道株式会社	1925 年	冊子	
高麗古陶磁考	中尾万三	—	冊子	
ブラジル移民事情	外務省通商局移民課	1923 年	冊子	
中央試験所業務提要	南満洲鉄道株式会社 中央試験所	1925 年	パンフレット	
奉天神社要覧	奉天神社々務所	1925 年	1 枚刷り	
奉天公所新築工事概要	南満洲鉄道株式会社	—	パンフレット	
列車時刻表 満洲線	南満洲鉄道株式会社	1925 年	パンフレット	
列車時刻表 満洲線	南満洲鉄道株式会社	1925 年	パンフレット	
列車時刻表 満洲線	南満洲鉄道株式会社	1925 年	パンフレット	
列車時刻表 朝鮮線	南満洲鉄道株式会社	1924 年	パンフレット	
旅行指南	四洮鉄路局	1924 年	パンフレット	日中語併記、営業成績表等 3 枚挟み込み
〈協和樓支那料理メニュー〉	協和樓	—	1 枚刷り	大連市淡路町 1 番地
哈爾濱前田時計店ウラル産宝石定価表	前田時計店	—	1 枚刷り	
〈ヤマトホテルメモ用紙〉	南満洲鉄道株式会社	—	紙片	
〈旅行持物メモ〉	水野勝邦	1925 年	紙片	
公合号	—	1925 年	紙片	
〈ハルビン地図〉	—	—	1 枚刷り	上半分断裂により欠
〈碧山荘（福昌公司華工収容所）パンフレット〉	福昌公司	1925 年	パンフレット	碧山荘は大連埠頭の各種作業に従事する 仲仕華工の収容所。埠頭の東南、東山町 にあった。
〈葉チラシ〉	王廉士葉社	—	1 枚刷り	
奉天毎日新聞 夕刊	奉天毎日新聞	1925 年 7 月 31 日	新聞	「來奉した学習院生徒」の記事掲載
業務案内	南満洲鉄道株式会社 鮮満案内所	—	1 枚刷り	
〈雲峰照像館価格表〉	雲峰照像館	—	1 枚刷り	
旅行ニ関スルコト	学習院	—	横帖	ジャソ式複写による旅行のしおり（一〜 四）。
〈旅行日程ほか〉	学習院	1925 年	便箋	11-74-2 と共に 朝鮮ホテルの封筒入り （水野勝邦殿 金田 と記載）。「費用概 算書」、「鮮満東蒙古旅行日程」計 3 枚が 文三 水野勝邦殿 の封筒入り
〈旅行日程ほか〉	学習院	1925 年	便箋	「大正十四年満洲東蒙古朝鮮旅行日程」、 会計報告書、計 3 枚。学習院の封筒入り
〈ヤマトホテルランドリー領収書〉	ヤマトホテル	1925 年	紙片	封筒あり
〈松本鴻三郎より水野勝邦宛書簡〉	松本鴻三郎（同封の 電報は金田）	1925 年 8 月 16 日	電報送達紙	長春新市街 松本鴻三郎→哈爾濱日本共 立病院 水野勝邦（ママ）殿。中に電報 送達紙入り。発信人は金田。「サクヤキ キヨウチハハサマニオメニカカリシ ンバイナクセイヨウアレ」
〈松本鴻三郎より水野勝邦宛書簡〉	松本鴻三郎（同封の 電報は金田）	1925 年 10 月 15 日	電報送達紙	2 枚
〈勝邦宛見舞名刺〉	—	1925 年	名刺	入院中の水野勝邦に宛てた見舞いの名刺 （華族、議員、政治家ほか）。36 枚
二百三高地ノ石	—		石	水野直の名刺箱だった紙箱を利用し、中 に石と紐が入っている。箱書きには「支 那貨幣」とあるが貨幣は入っていない。
見舞状（勝邦入院に関する見舞状）	天羽英二	大正 14 年	封筒	修学旅行中の入院後、帰国して帝大病院 に入院、見舞状を直宛てに送ったもの。

目録 2：中国研究の履歴書

史料名	形態	作成者	年代	備考
学園教授の紹介		麗澤大学		図書館報か
水野勝邦著書論文一覧				
〔我が半生邦訳コピー〕				水野勝邦が登場する部分
諸通信、報告、論文				著作一覧
講義（一）		水野勝邦		
講義（二）		水野勝邦		
講義（三）		水野勝邦		
〔水野勝邦履歴〕				
〔ゼミ研修会メモ〕				
〔ゼミ生写真〕7枚				
〔立正大学経済学部長任命状コピー〕			昭和36年4月1日	
占領軍統治下のため議員の登院、GHQ訪問に役立たせるため貴族院が発行した身分証明書 昭和二十年十二月十三日発行（コピー）		貴族院	昭和20年12月13日	
治安と資源開発				欄外に「講義メモ 衆議院議員に招ねかれて中国問題を講演」と書き込み
〔支那において見分せる具体的問題について調査研究〕	冊	水野勝邦		
華北ノ諸問題			昭和19年12月（第22次）	
水野勝邦時事解説 六中全会と五全大会	新聞記事	専大経済新聞	昭和11年2月1日	
伊東忠太博士の支那旅行 昭和十六年頃 伊東博士より旅行談を聞く（於大和上野市）		水野勝邦		中国視察旅の範とした伊東博士の足跡 この足跡を昭和の学徒として踏破することを願った
調査研究手記				欄外に中国古銭拓本8枚
〔水野公館前か 水野可寿子、和子、武藤梅子、僅恆〕	ゼラチンシルバー		昭和10年代	
〔水野公館前か 水野可寿子、和子、武藤梅子、僅恆〕	ゼラチンシルバー		昭和10年代	
〔北京郊外ピクニック 和子ほか〕	ゼラチンシルバー		昭和10年代	
函谷関	ゼラチンシルバー			
潼関	ゼラチンシルバー			
中国雑記（中国旅行記）目次（中国研究メモ）		水野勝邦		
兒島讓 満州帝国（コピー）				
溥儀我が半生（日記）訳一 清国宣統皇帝（コピー）				
身分証明書		在北京総領事華山親義	昭和19年11月20日	封筒あり、メモ添付あり
重要視察見学地		水野勝邦		
中国渡航記録		水野勝邦		
渡航手続		水野勝邦		
渡支旅行旅程「第二十二次」			昭和19年	

史料名	形態	作成者	年代	備考
執照（コピー）		中華民國署理外交部特派奉天交涉員高	大正 14 年 7 月 31 日	
ホホホト（厚和）を訪ねて		水野勝邦		
南京より帰って（コピー）		水野勝邦		
京劇武將旅装をつけて	ゼラチンシルバー			複写
旧外交部長曹汝霖との記念 於宮元公館	ゼラチンシルバー			複写
華北政務委員会要人と夫人	ゼラチンシルバー			複写
水の江滝子と	ゼラチンシルバー			複写 昭和 13 年 12 月 松竹歌劇団の北支皇軍慰問につき依頼により約 12 日間行を共にす
新郷の部隊にて	ゼラチンシルバー			複写
水野公館にて 武藤梅子 小学校教員僅恆（元満洲旗族の家柄なるため北京官話 を話す） 和子 可寿子	ゼラチンシルバー			複写
〔天安門前の水野勝邦〕（コピー）				
水野勝邦氏を中心とする有志 午餐座談会（コピー）				
水野公館の使用人				書き込みのみ、写真なし
私と中国（旅の思い出） 麗澤大学講師水野勝邦（コピー）		水野勝邦	昭和 48 年 10 月 5 日	
北京市内二区西城屯絹胡同 三六号 水野宅（厲園） 1939—1944 電話西城 1408				水野公館見取図
〔旧蒙古王族邸〕宮本公館 院子ニテ	ゼラチンシルバー		昭和 13 年 5 月	
天安門の前	ゼラチンシルバー			
李香蘭父子と会談 山口淑子、（父）山口敏夫 右より二人目勝邦	ゼラチンシルバー			
長島隆二と〔宮本公館〕	ゼラチンシルバー			
〔水野公館〕	ゼラチンシルバー			
〔水野公館〕	ゼラチンシルバー			
大谷隆三と	ゼラチンシルバー			
水野の公館の開設		水野勝邦		
〔中国地図 旅程〕				
中国調査渡航記録				戦前の中国旅行行先・旅程リスト
〔水野勝邦写真〕		北平同生美術照像部	昭和 14 年	

水野勝邦が執筆した論文・報告書

タイトル	掲載誌または発行所等	年代
河南行	斯文	1931 年
上代日本漢文学の研究	東大	1931 年
遊仙窟の研究	東大	1931 年
中国調査報告 (1～13)	斯文	1932～1939 年
中華民国の水旱天災	専修大学経済法律論叢	1934 年
支那の経済危機救済策を見る	専修大学経済法律論叢	1935 年
山西省の経済建設に就て	専修大学経済法律論叢	1936 年
中国通貨政策	昭和第一商業学校	1936 年
支那事変前の山西省経済建設	精文堂	1937 年
蒙古民族の社会	外務省報告	1938 年
南京より帰りて	日華時報	1938 年
漢口	斯文	1939 年
現代支那の社会経済思想の研究	外務省報告	1940 年
近代支那の民族社会史		1940 年
華北の治安	研究会	1940 年
中国文学の価値		1941 年
西北貿易の意義		1942 年
華北の諸問題		1943 年
日華親善論 文化的民族的に見た両国	楊子江	1943 年
中国産業論		1944 年
北京の日本語学校 実情と中国人の日本語熱	日華学報	
北京の交通事情 交通事情と交通施策	自動車界	

水野勝邦が執筆した報告書・旅行記ほか（掲載誌等不明）

タイトル	タイトル
桃源行	福州記
満洲の苦悩	言葉の不便（長沙にて）
軍人の中国研究態度	余剰資源と貴重資源貿易
外務省系の実態	大平原の競馬
満洲事変勃発前後	中国へ渡る日本人の心境
函谷関をくぐる記	中国人の日本観
洛陽の風物詩	中国人の民族性
洛陽の町	治安の話
長途バス旅行記	飢饉と餓死
排日運動参加	阿片
広東派への日本の動き	暴動の一面
香港英国の建設実力	ドイツの経済実力
南海航行奇聞	信の問題
賭博と実際	中国研究入門
盧溝橋事件	水野公館
知日親日反日派	中国の女
北京の四季	嫖
中国食べ物讃	湯屋 民衆の慰安
聴戲の中国味	東安市場
職業知識	雲崗の今昔
武力を持った日本	三大ホテル

タイトル	タイトル
中国人の生活	北京の電車
匪賊 その実際	日本の特務機関
日本の資源開発	三井物産と三菱商事
ドイツの資源開発	地方の旅舎風景
英国の資源開発	銅幣の生活
東京―北京四日間	漢口の夏
中国単独講和の夢	日本占領下の漢口
溥作儀の人気	福州の夏
西北貿易の意義	南京陥落後
西北地区への無関心	スパイの嫌疑
中国映画に学ぶ	町角の風物
洪水	中国語の複雑
近代都市建設 南京・汕頭・廈門	大陸気候感覚
洞庭湖	中国人の動物飼育
揚子江	紙への尊敬
日本人の居ない杭州	租界の特長
水 黄河・洛水・山西	偽物の価値 貨幣・骨董・文具
黄土 その特殊性	中国人の社交術
万里長城見物記	面子

水野勝邦の中国渡航記録（「中国研究の履歴書」より）

	年月	旅行条件	中心地	訪問先ほか
1	1925 年 7 月～8 月	修学旅行		朝鮮、満洲 旅費 200 円
2	1931 年 6 月～11 月	外務省派遣		満洲、蒙古、朝鮮、華北、華中 旅費 1000 円
3	1932 年 7 月～9 月			大連、金州、青島、上海、杭州 可寿子同行
4	1933 年 7 月			台湾、上海、汕頭、厦門、福州、香港
5	1934 年 7 月		北京	大連、北京、天津 平松（同行者カ。以下同）
6	1935 年 3 月～5 月		北京	春名、木村
7	1935 年 7 月～9 月	長崎～上海航路	揚子江	漢口、武漢、長沙、桃源、南京 田代
8	1936 年 7 月～8 月	敦賀～北鮮	北京	満洲、通州、包頭、太原
9	1937 年 7 月～9 月	南洋視察		シャム、マレー、スマトラ、ジャワ、比島 旅費 2500 円
10	1938 年 1 月	占領統治	南京	十二日間 上海 海軍機 羽田—上海
11	1938 年 3 月	外務省特別研究員	北京	華北、内蒙古 須田氏（厚和） 月額 200 円
12	1938 年 5 月～6 月	外務省特別研究員	北京	天津、チハル、満洲里 宮元公館
13	1938 年 10 月	外務省特別研究員	北京	華北 白井松次郎 宮元公館
14	1938 年 12 月	外務省特別研究員	北京	華北、新郷 松竹少女歌劇団皇軍慰問
15	1939 年 1 月～2 月	外務省特別研究員	北京	漢口占領統治 南京 北京—羽田平松
16	1939 年 3 月～4 月	外務省特別研究員	北京	開州、新郷 水野公館開設
17	1939 年 5 月	外務省特別研究員	北京	三日間 北京 可寿子同行
18	1939 年 6 月～7 月	外務省特別研究員	北京	天津—大連—門司 可寿子同行 帰国
19	1939 年 8 月	北支那開発囑託	北京	天津、済南 博同行
20	1939 年 10 月～12 月	北支那開発囑託	北京	天津—門司 可寿子同行
21	1940 年 4 月～6 月	北支那開発囑託	北京	上海、南京、鎮江、開封
22	1940 年 8 月～9 月	北支那開発囑託	北京	朝鮮、満洲、華北 小田川同行
23	1940 年 9 月～10 月	北支那開発囑託	北京	朝鮮、上海、南京、連雲港
24	1941 年 5 月～7 月	北支那開発囑託	北京	華北、蒙疆、大同、雲崗 野村益三
25	1941 年 8 月	北支那開発囑託	北京	
26	1941 年 10 月	貴族院皇軍慰問	北京	北京、済南、曲阜、青島、太原 土岐子
27	1941 年 11 月～12 月		北京	
28	1942 年 3 月		北京	
29	1942 年 8 月		北京	張家口、厚和
30	1942 年 11 月		北京	
31	1943 年 5 月～6 月		北京	
32	1943 年 7 月		北京	
33	1943 年 8 月	大東亜省委員	北京	石家荘、徐州、徳県、満洲
34	1943 年 10 月	貴族院皇軍慰問	北京	華北、蒙疆、包頭 橋本伯
35	1944 年 5 月～6 月	大東亜省委員	北京	上海、南京、蒙疆 羽田—上海 手束
36	1944 年 7 月～9 月	大東亜省委員	北京	天津、唐山東洋化学 KK
37	1944 年 10 月～11 月	大東亜省委員	北京	山東、博山東洋化学 KK 11 月 15 日出発
38	1945 年 3 月	大東亜省委員	中止	

和暦を西暦に直した。第 9 回は中国渡航ではないが、リストに記載されているままとした。記載されていない部分は空欄とした。